

ふたなりちゃんか
意思の通じない触手生物に狂うまで
射精管理飼育されるお話

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

とある山奥の小さな村。

ぱっと見は何の変哲もないのどかな村だが、1つだけ大きな秘密があった。

この村ではなぜか10年に1人ほどの確率で、双成(ふたなり)の赤ん坊が生まれる。女性器と男性器の両方を併せ持った女の子のことである。

村人はこの双成に頭を悩ませていた。なぜなら双成は一般人に比べてかなり性欲が強く、特に射精に対する欲求は自分でもコントロールできない者が多い。そのため、性に目覚めた双成による不純性交遊や、酷い場合は強姦などの犯罪による風紀の乱れが小さな村を覆っていた。幼少期からの教育や、貞操帯での人為的な射精管理でも効果は薄かった。

しかし、村はずれの洞窟内で偶然発見されたあるモノにより、村に特異な風習が生まれ、以来、双成による被害は激減した。

風習とは、性に目覚めてオナニーをする年代に育った双成を、村はずれの洞窟に閉じ込めてしまうというものだ。期間は短くても1カ月、長ければ半年以上にもなる。

洞窟内に巣食うのは『禁欲神の権化』と呼ばれる触手生物。性技に長けており、あらゆる生物との性交技能を持つ無数の触手の集まりである。だが、名に『禁欲』とある通り、この触手は性交相手を絶対に絶頂させない。徹底的に禁欲させることに特化している。

そんな触手と長期間に渡り同居した双成は、決して抵抗できない人智を越えた力に拘束された状態で射精管理され、自分勝手な射精が不可能になるまで精神改造されることになるが、そのおぞましい内容は本人しか知らない。洞窟から出てきた双成はこのことについて詳しく語ろうとしないからだ。

そしてまた、1人の双成少女が犠牲になろうとしていた...

『目覚め』

「うっ...はあ...んふっ...！」

目覚めた瞬間、下半身がビクンと跳ねるのを感じた。同時に、ああ、またやっちゃったか、と思う。淫夢を見るといつもそうだ。夢精した時は、快感よりも気持ち悪さや恥ずかしさのほうが強い。

下着を替えなきゃ、と身じろぎしようとして、何かがおかしいと気付く。両手足が全く動かさず、無理矢理変な体勢で固定されているような感じだ。目を開けると、薄暗くてよく見えないが、自分が裸であることが感覚で分かった。「えっ...何これ...！？ こどこ...？ いやっ！ 誰かあ！」

彼女の声は空しく反響するだけだった。パニックになりそうな頭を、深呼吸で何とか落ち着かせる。

暗闇に目が慣れてくると、ごつごつした壁面から、ここが洞窟のような場所だと分かった。それから、何やら甘ったるい香りがすることに気付いた。

「ウソ...これって...」

視界がはっきりしてくると、自分の手足が、粘液でテラテラ光る肉塊のような物体に埋まっているのが見えた。地面は大きなミミズのような、グロテスクな生き物で埋め尽くされており、彼女を狙うようにウネウネと蠢いていた。そして、彼女の足元、股間にぶらさがったペニスの真下あたりの位置に鎮座する、大きな花のような形の物体が見え、そうやら先ほどからする甘い香りは、その花から漂っているようだった。花の中心にあるめしべのような触手は、彼女が放った夢精精液がべっとり絡みついていた。

「禁欲神...様...？」

こんなにおぞましい光景を見ても、彼女が正気を保っていたのは、村に伝わる『儀式』についての噂を何となく覚えていたからだった。現在、村で唯一の双成であり、ふたなりちゃんというあだ名で呼ばれている彼女も、半ば子供を怖がらせるための作り話だと思っていたが、これが夢でないとしたら、『儀式』は現実のものであり、自分が選ばれたのだらうと悟るしかなかった。

禁欲神の本体は、彼女の真下で開花している『触手花』であり、その中心から発せられる催淫物質を吸引した者は、淫夢により夢精を促される。精液を触手花に『受粉』させることにより、禁欲神との『契約』が交わされるのだ。つまり、無期限の『射精管理飼育』の始まりである。

『射精管理1日目』 触手貞操帯装着

禁欲神との『契約』を終えた彼女には、その証として、あるモノが股間に装着される。

それはぴったりと腰に吸い付く、ベルトのような触手で、ちょうどへその下辺りにくる中心部位は、何かを孕んだように膨らみ胎動する、どこか女性器を思わせるような形になっていた。

「ひっ...やだあ...生温かくて、何か動いてるよお...」

得体の知れない軟体生物が下腹部で蠢く嫌悪感に、堪らず逃げ出そうと体を振るが、手足が触手にしっかりと巻き付かれていて抵抗できない。

触手ベルトの装着はこれで終わりではなかった。先ほど女性器のようだと思った中心部位のさらに下部から、薄い膜状の触手が、粘液を垂らしながら這いずるナメクジのようにゆっくり下りてきて、彼女のペニスを舐めるような動きで覆い始めた。

「ふわっ！ おちんぽが...包まれて...ひやううっ♥」

思わず甘い声が出た。彼女のペニスを覆っている膜の内側は柔らかい突起が無数に付いており、分泌される粘液と相まって、性的な刺激が与えられ、意思とは関係無く勃起しそうになる。

しかし、その頃には彼女のペニスは触手膜にすっかり覆われており、勃起することはできなかった。内側とは違い、膜の外側はプラスチック程度の硬さがあるのだ。ちょうど貞操帯と同じような形になっている。

気が付けば、両睾丸にもヒトデのような触手が張り付いており、まるでペニス全体を拘束されたようになっていた。

「ふっ、ぐっ...いやあ...おちんぽ苦しいよお...勃起できな...ひっ！ うあああっ！」

突然襲いかかった鋭い苦痛に彼女は悲鳴を上げた。ペニスを覆っていた触手膜から、何やらチューブのようなものが伸びており、その先端が尿道口に突き刺さったのだ。

「ひっ、ぎい...痛いっ！ だめえ！ 奥に入ってこないでえっ！」

懇願も空しく、チューブ状の触手は尿道を塞ぐように奥へ奥へと突き進んできた。ただ、粘液に麻酔作用でもあるのか、痛みは次第に消え、はむず痒いような不思議な快感だけが残る。縮こまっていたペニスは再び勃起しようとするが、それは叶わない。

「これ...貞操帯...？ やだ、こんなの...勃起も射精もできない...」

彼女に装着されたのは、禁欲神からの射精管理を受ける証となる、触手貞操帯だった。今後、彼女は自分の意志で射精はおろか、勃起すらできない状態となった。常に手足は拘束されているため、触れることもできない。

初日から早速、もどかしさで眠れない夜となった。



射精管理 / 日目

『射精管理3日目』 増精剤睾丸注入

射精管理が始まって、最初に彼女に施された調教は、睾丸の機能改造だった。

「はあっ、はあっ...またあの薬...？ もうやめてえ！ 金玉に刺さないでえ！」

触手貞操帯の中心部位にある、女性器のような口がぱっくりと開かれ、そこから細い触手が睾丸に向かって伸びてきた。その先端には鋭い針がついており、針の先からは緑の液体が滴っている。

「それいやあっ！ また辛くなる...やめ...うあああっ♥」

一瞬の躊躇いもなく、針は睾丸の中心まで深々と突き立てられた。謎の液体が、彼女の急所の隅々まで行き渡る。痛々しい光景だが、彼女の叫びに苦痛の色はなく、むしろ感じているようだった。

昨日から、彼女の睾丸には日に3度、この液体が注入されていた。禁欲神の体液から生成された強力な増精剤で、精子の生産速度を通常の数十倍にも高める効果がある。

「うあっ！ はあああっ♥ 精子作られてるの分かるうう♥ 辛いよお！ ムラムラするのが辛い！ ひっ、だめえ！ もみもみしないでっ！ キンタマ揉んじゃだめえ♥」

睾丸に張り付いたヒトデ型触手が、薬剤を馴染ませるように、睾丸をこりこりと揉みほぐすと、もどかしさは一層高まる。

増精剤の効果はそれだけではない。睾丸に対する痛みを、全て快楽に変換してしまう。針で刺された瞬間は、かなりの快感に襲われたはずである。

そしてもう1つの効果として、睾丸の貯精量のリミッターを外してしまう。通常、睾丸に溜めていられる精子量は2、3日分であり、それ以上は古い精子から順に体内に吸収されるが、この薬剤は精子の再吸収を阻害することで、何カ月分でも、何年分でも、睾丸が破裂しない限り溜め続けることを可能にする。

「おちんぽ勃起できないっ♥ お願い、これ外してえ！ おねがい、おねがい！」

貞操帯に閉じ込められたペニスは、内側の小さな突起群に常に刺激されながらも、絶対に勃起は許されず、塞がれた尿道の隙間から涎のようなカウパーを垂らすだけだ。

彼女は息を荒げ、襲い来る射精欲求の波に耐えるしかない。いや、耐えられなかったとしても、禁欲神の完璧な拘束からは逃げられない。

無期限の射精管理も、まだ3日目。禁欲神にとっては、ただの準備期間に過ぎない。

『射精管理7日目』 勃起許可焦らし

「はぁ♡ はぁ♡ ああん♡ 1週間ぶりの勃起っ♡ きもちいい♡」

自分が何をされているのか分からなかった。とにかく、痺れるような性感が全身を駆け巡り、小刻みな痙攣が止まらない。幾千もの舌で舐め回されているようだった。

彼女はレオタード型の水着のような触手膜を身にまとっていた。『触手スーツ』とでも呼ぶべきだろうか。身体のラインがはっきり出るほど密着しているものの、その表面にはミミズのように蠢く膨らみが無数に浮き出ている。内側は性感帯を愛撫するための触手で埋め付くされているのだ。それらが彼女の乳房、乳首、アナルの皺から陰唇まで、催淫効果のある粘液を塗りたくるように舐め回し続ける。より感覚を敏感にするためか、視界は塞がれていた。

「ぬあぁっ♡ これしゅごいい♡ おかしくなるう♡ なんでえ！？ 何でおちんぽ触ってくれないのお！？ お願いさわって♡ しごいてえ♡」

彼女の泣きそうな声が響く。残酷なことに、触手スーツは男性器の部分だけ避けるように穴が開いており、他の触手も、絶対に触れようとしない。

「はぁあぁあぁっ♡ おちんぽ無視きついよお！」

1週間、増精剤注入や睾丸マッサージで熟成された男性器から、初めて貞操帯が外されて勃起が許可されたが、それはより彼女を追い込むための残酷なご褒美だった。

勃起できたことでより感度が上がり、射精欲求が暴れ出す。他の性感帯を舐められたり、竿や玉袋の付け根を優しく焦らすように撫でられると、ピョコピョコと音が聞こえてきそうな滑稽な動きで、竿が激しく上下に痙攣する。カウパーを撒き散らして必死におねだりするようなその様は、まるで自分の意思を持っているかのようだった。

「うわあぁあぁっ！ 気持ちいいっ♡ 乳首もおっぱいもお♡ お尻も気持ちいい♡ おちんぽに響くう♡ 射精っ♡ 射精しだいっ♡ 許じてっ！ もう許じでえ！」

とろけるような快樂と焦燥感の中、触手に対して必死に叫ぶが、当然のように返事はない。彼女の言葉を理解しているのかそうでないのか、それさえ分からない。それがより深い絶望感となって、気が狂いそうになるが、たかだか1週間の射精禁止では、人間は狂えはしないのだろう。

触手スーツが脱がされるまで、数時間もの間、焦らし責めは続けられた。

『射精管理9日目』 触手エネマグラ

その日は、情けない四つん這いのようなポーズで拘束された。体勢が変わった拍子に揺れ動いた陰囊が、心なしかずっしりと重いように感じた。

「あう...今日は何されるの...? お尻突き出させないでえ...♥」

思いきり尻を突き出せるような触手の拘束に、羞恥を感じたものの、日々の射精禁止による焦らし責めにより蓄積された欲情で、嫌でも期待するような声が出てしまう。今日はどんなふうにも虐められるのだろう。下半身の様子が自分で見られないことも、より発情を誘った。

「ひゃうっ♥ そこ、お尻の穴あ♥ あったかくて硬いの...当たってるう♥」

彼女の肛門には、独特な形をした触手の先があてがわれていた。粘液を分泌しながら、肛門をほぐすように、グリグリと強くめりこんでは離れる動きを繰り返す。明らかに挿入するための動きだった。

「うあ...ダメ...お尻♥ 入っちゃう♥ ダメ...♥」

いつ挿入されるのか分からない動きで肛門口を刺激され、ペニスは勃起不可能な貞操帯の内側でズクズクンと空しく脈動する。

「おおっ！！♥♥」

その時は突然やってきた。触手の一番太い先端部分が、括約筋を押し広げて挿入されたかと思うと、一息でヌルンと細くなった根元部分まで腸内に飲み込まれた。その瞬間、衝撃的な快感で思わず間抜けな声が出てしまう。

彼女の腸内に挿入されたのはエネマグラ型の触手だった。アナル責めという曖昧なものではなく、前立腺というただ1点の部位を責めるために形成された触手だ。先端のヘッド部分が、彼女の呼吸と括約筋の締めつけリズムに合わせ、前立腺を腸壁越しにノックするように食い込む。その度に、ペニスを内側から溶かされるような快感が走り、鈴口から涎のようにカウパーが溢れ出る。

「おっ♥ おっ♥ おおうっ♥ これ、らめっ♥ おちんぽ溶けるっ♥ 響くうっ♥ ひび...うあっ!? うああああああああ! ?♥♥」

彼女の喘ぎが途中から悲鳴に変わった。そう、これはただのエネマグラではない。『禁欲神』の一部なのだ。

腸内の触手エネマグラはある『変形』を行っていた。ヘッド部分から生じた、肉眼では見えない毛細血管レベルの触手網が、細胞と同化しながら腸壁を侵食し、根を張るように前立腺を直接犯し始めたのだ。

「うああっがっ。これ...やば...!!♥♥ ぎぼちいいっ!♥ 怖いっ!♥ こわいこわいごわいっ♥ ちんぽ溶けてなくなるっ!♥」

一生経験するはずのなかったであろう、前立腺を直接蹂躪される快楽に恐怖さえ感じるが、なぜか不思議なもどかしさもあった。あと一步何かが足りないような、そんな感覚があった。

彼女はまだ未経験なので分からないのが当然だが、前立腺刺激は射精を伴わないライオーガズム(通称:メスイキ)という絶頂感をもたらすことができる。しかし、前立腺を侵食する触手が、それをあと一步で妨げてしまうのだ。

「おほっ♥ うおっほおっ♥ もーらめ♥ 許じでっ♥ 許じでえええ!!♥♥」

体力の続く限り終わらない前立腺責めの後、今度はその快感に応じた反動としてやってくる爆発的な射精欲の波に苦しめられるのであった。

『射精管理 11日目』 触手ブラシ亀頭磨き

「はあっ、はあっ♡ 射精え...射精したいよおっ！♡ お願い、これ外してえ！♡ おちんぽ楽にしてくださいっ！♡」

彼女はもう何回目か分からない懇願を、自分を拘束する触手に向かって叫んだ。当然のように返事はない。言葉が通じているのか、それすらも分からない。

日を経るごと、無制限に蓄積されていく射精欲求と共に、時間の流れがどんどん遅くなっていくように感じる。貞操帯の中でペニスが脈動するたびに、『射精』の2文字が頭をよぎり、切なさで身悶えしてしまう。

「はああああ♡ 勃起できるうっ♡ おちんぽ勃つ♡」

願いが通じたのかどうかは分からないが、不意に貞操帯の拘束が緩み、ペニスがむくむくと勃起する。それだけで身震いするほどの快感があり、彼女は嬌声を上げた。

勃起はできたものの、貞操帯は伸縮しただけで外れてはいない。なぜか亀頭だけが露出させられ、竿が下向きに固定された形になった。すると何やら細い触手が、両脚を拘束する触手の一部から派生して、ペニスに向かって伸びてくる。先端に無数の微細な触手が固まっていて、まるで歯ブラシのようだ。

「ひっ！！ ひあああああ！！♡」

触手ブラシの標的は、不自然に露出させられた亀頭だった。粘液を塗り付けながら、左右から挟み込んでシヨリシヨリと磨くように執拗な刺激を与える。それは初めのうちは大きな快感だが、亀頭のみへの刺激が続くと、次第に搔痒感だけが天井知らずで大きくなり、ただの痒みとも痛みとも違う、性感神経を直接弄られているような暴力的刺激となる。とても耐えられるものではないが、絶対に絶頂できないため、終わりが無い拷問的責めである。

「ひああああ！！ がっ、ひぎっ！！ ちよっ...先っぽばかり...！？ やめでえっ！ これ、おがじくな...ひっ！！ ひiiiiiiiiiiiiiiii！！」

1時間後。

彼女の亀頭は真っ赤に膨らんだ果実のようになり、その様は痛々しいと同時に、丹念に磨き上げられた宝石のような美しさもあった。

「あぐああうううっ！ くひっ...！ もう許じてええええ！！」

顔を涙と鼻水と涎でグシャグシャにしながら訴えるが、無情な亀頭磨きは終わらない。それどころか、更なる責めを加えるための触手が準備されつつあった。

それは、円周部分にごつごつした突起が並んだ、回転する歯車というか車輪のような形状の触手で、ゆっくりと亀頭の先端に近づき、突起が鈴口に軽く埋まる位置で止まった。それに彼女が気付いた瞬間、車輪が勢いよく回転を始めた。

「ふぐっ！？ ぐああああああああ！！ おじっごっ！ おじっごの穴ああああ！！ らめっ！ 狂うっ！ ぐるううう！！」

ほどよい硬さの突起が、車輪の回転に合わせ、エンドレスに敏感な鈴口を抉り、彼女の目の前に火花が散る。想像を絶する責めに遭い、臨界点を超えるのに時間はかからなかった。

「うがあああああああ！！ なんが出る！！ 漏れるうううう！！！！」

彼女の身体が大きく跳ね、鈴口から、勢い良く液体が噴射された。精液でも、尿でもない、透明な水のような液体だった。俗に言う『男の潮吹き』というものだろう。本来は射精直後の亀頭責めによって引き起こされることが多いが、彼女の場合は射精のプロセスをすっ飛ばしてしまったようだ。

「.....う、ぐあ」

潮吹きが終わると、彼女は自ら意識を切るように失神した。



まだいじわる!!
おバカじいぢやない!!

やめて!!
先っほおえ!!
だめばか!!

カク!!

カクカク!!

カク!!

射精管理 / / 日目

『射精管理14日目』 絶頂抑制手マン責め

「あゝっ♥ あゝっ♥ イグッ♥ おマンコがイグう。 イッ...うあゝあゝっ！ イゲないいい！ イガせでっ！ イガぜでえええええっ！！♥♥」

かれこれ3時間近く、洞窟内にはグチュグチュという淫らな水音がリズムカルに響き渡っていた。それに合わせ、彼女の悲鳴にも似た苦しげな喘ぎ声と懇願が絞り出される。

本日、禁欲神が標的にしたのは彼女の『女』の部分、膣だった。手マンをする時の人の手に近い形で、膣内を刺激するための突起群が密集した、女殺しの触手を挿入する。人間には不可能な動きで、Gスポットやポルチオなど、彼女の性感帯を執拗に責め立てる。2週間の射精禁止で性欲と感度が異常なまでに上昇している彼女にとって、その刺激は3秒もあれば深い膣イキに達するほどの快感だった。

「があゝあゝっ！♥ まだっ♥ イゲそうなのにイゲないっ！♥ 女の子イギできないよおっ♥ ぎぼじいのだけどんどん膨らんで...いやあゝっ！！♥」

しかし、責めが始まってから、一度も絶頂を感じる事ができない。イク寸前の感覚はあるのに、一向にそれが始まらない。ボタンが壊れたエレベーターのように、快感だけがどんどん上がって行って、絶頂という終わりが見えてこない。

原因は彼女の首から注射された禁欲神の体液だった。睾丸に注射されたものとはまた別物で、一時的に絶頂することができなくなる抑制剤の効果がある。

「あゝっっぐあゝあああゝっ！♥ イグっ♥ イツツツツグううっっっ.....！！ うあゝあゝっ！！♥ もうイガせでっ！！ 終わらせでえ！！♥♥」

拘束された手足を懸命にばたつかせ、身を振っても、もどかしい超快感の波は少しも紛れない。貞操帯に閉じ込められたペニスには刺激は与えられていないが、膣の快感と連動し、触手に塞がれた尿道口の隙間からカウパーをはじけさせる。双成娘の性欲の源泉は睾丸に由来しているため、徹底的な手マン責めの最中でも、射精欲求は忘れることができない。

射精、ドライオーガズム、膣イキと、性欲を快楽で発散させるための方法を1つずつ封じられ、絶望感で狂いそうになっている彼女だったが、禁欲神としては、これでようやく準備が整ったというところである。

『射精管理17日目』 触手焦らし回春マッサージ

禁欲神の『飼育』が始まってから17日間の月日が流れた。人生でも経験がないほど長期間、しかも毎日行われる尋常ならざる性拷問の最中での射精禁止により、彼女は自分でもずっしりとした睾丸の重みを感じられるほど精液が溜まっているのを感じていた。

「ふわああああああ♥ そこっ♥ 弱いから♥ 金玉カリカリしないで♥」

彼女はベッドのほどの広い肉塊の上でうつ伏せに拘束されていた。カエルのように広げられた両脚の間で露わになる性感帯を、人の手以上に繊細な動きのできる触手に責められる。鼠蹊部に肛門のキワ、玉袋や乳首など、感じやすい部分を探すようにいやらしく刺激する。まるで怪しげな回春マッサージそのものである。

「ひいいいいああああ♥ 射精っ♥ ちんぽ動かしたいっ♥ 射精したい射精したい射精じだいい♥ おまんこあったかいっ♥ トロトロじで.....うがあああ動がじだいいいい！！♥♥」

強い快感をもたらしながらも決して射精に導かない回春責めは、今の彼女にとって地獄のようだったが、それ以上に苦しいのはペニスに対する責めである。

禁欲神は、ベッドの一部の細胞を変質させて、本物の人間の膣そっくりに作り変え、そこに彼女のペニスを挿入させていた。しかし彼女の腰は触手でガッチリ固定されており、1ミリ足りとも動かすことができない。しかもペニスには射精を封じるための触手がきつく巻き付いている。疑似膣の柔らかな温かさとぬめりを感じながら、絶対に射精できなくするという残酷な調教だった。

「おまんこさぜでっ♥ セックスっ♥ 中出じっ♥ 種づけえ♥ 精子作り過ぎでおがじくなっちゃうよおお！！♥♥」

回春による増精に加え、膣の感触をペニスで感じることで、直接的に本能に訴えかけるような欲情で狂う姿は、凶悪なレイプ犯顔負けだった。しかし、禁欲神の拘束は完璧であり、射精できる可能性はゼロだ。

「あゝあゝああああ！！♥♥ ごめんなざいっ！ もうじまぜんっ！ 無理矢理ゼグズとがじないがら許じでえええ！！」

全く説得力のない反省を叫ぶも、当然、責めは終わらない。飼育対象が壊れたとしても禁欲神にとっては関係がない。ただ1日1日、容赦なく彼女を追い込んでいくだけである。

『射精管理22日目』 触手睾丸増設

「お`お`お`おおお——！！❤️❤️❤️ キンダマおぼいいい！！❤️❤️ ムラムラ我慢できないっ！❤️ 狂っちゃうっ！❤️ おがじくなるううう！！❤️❤️」

飢えた獣のような叫び声がこだまする。およそうら若き乙女とは思えない、鬼気迫る悲鳴だった。

彼女は禁欲神が作り出した肉壁に四肢を根元まで飲み込まれ、まるで壁掛けの剥製のような姿で拘束されていた。卑猥な部分だけを露わにされ、首以外はピクリとも動かさない。

「い`や`あ`あああああああ！！❤️❤️ ゼーじっ！ ゼーじ作り過ぎいいいい！！❤️❤️ うあ`あ`あ`あああああ！！！！❤️❤️」

彼女が狂わされている原因は、股間にぶらさがっている2つの睾丸の変化だった。元の大きさを知っていると驚くほど不自然のサイズになっている。ソフトボールぐらいはあるだろうか。

肥大化の原因は、それぞれの睾丸に接続された触手だった。まるでウリの実のなった蔓のように、細い触手の一定間隔ごとにむき出しの睾丸に似たグロテスクな物体がぶら下がっている。

これらは見た目のとおり、1つ1つが禁欲神が細胞変質により作り出した睾丸なのである。『契約』の際に彼女から取り込んだ精液をもとに、全く同じ精子を、恐るべき速度で生産している。そして生産された精子は全て、彼女自身の睾丸に統合される。まさに増設睾丸と呼べるものだ。

1つの増設睾丸の精子生産速度は、1時間で10億個。これは1回の射精量が多い彼女でも放出するのに2回はかかる量である。24時間あれば240億個。増設睾丸が10個あれば2,400億個。さらに彼女自身の睾丸機能が加われば、その生産量は人智を超える。彼女の睾丸機能が改造されていなければ、とっくに破裂していたところだろうが、無尽蔵に精子を溜めることができるようになったせいで、増精量に比例して天井知らずに大きくなる狂うほどの欲情を受け止めなくてはならない。

「射精っ！！❤️ 射精射精射精射精射精射精射精射精射精射精射精射せいしゃぜいじゃぜえええ！！！！❤️❤️❤️ ダメっ！！ 死ぬっ！！ じぬじぬじぬじぬうううううう！！！！❤️❤️」

いっそ死んだ方がマシだと思えるほどの欲情が襲う。しかし、射精のしすぎによる腹上死や衰弱死はありえるものの、射精ができないことで死ぬことはまず不可能だ。今にも暴発しそうに脈打つペニスは、触手によりぎっちり締め付けられ、僅かなカウパーを痛々しく漏らす程度である。

彼女の崩壊は少しずつ始まっていた。

『射精管理25日目』 射精封じ触手オナホ

彼女はもう射精すること以外のまともな思考を保てないでいた。超増精により小ぶりなスイカ並みに膨れ上がった睾丸は片方1kgはあるだろうか。ずっしりとした玉袋が彼女の動きに合わせて揺れると、大量に詰まった精子がでぷんでぷんと音を立てているような気さえする。

「ぬお`お`お`お`お`おおお——！！❤❤❤ おちんぽおっ❤ 食べられるうっ❤❤ そんなのでジュポジュポされたら絶対ヤバイっ❤❤ やばいやばいやばいやばいい❤❤」

そんな彼女の射精欲求を禁欲神はさらに残酷に追い込もうとしていた。ナマコかイソギンチャクを思わせる筒状の触手が、ゆっくりとペニスに近づけられる。彼女に見せつけるように開かれた筒の中身は、無数の突起群やヒダが、たっぷりと分泌された粘液中で光っており、何のための触手なのかは一目瞭然だった。これまでペニスへの直接刺激をおあずけされ、増精ばかりされてきた彼女のペニスは、その光景を見ただけで激しくいきり勃ってしまう。

「ぐあ`あっ...おちんぽぐるじい...！！ 絶対射精できないいっ！！ こんな状態で...だめっ！！ 絶対狂っちゃう！！ だめだめだめええ！！！」

今まさに搾精触手に呑み込まれようとしているペニスには、非常にも、精囊まで届く栓で尿道をみっちりと塞がれ、さらに竿の根元をきつく縛るといふ、徹底的なまでの射精封じが施されていた。こんな状態のペニスを激しく搾精責めされたら、どんな地獄が待っているか想像もつかない。彼女は恐怖しながらも、搾精触手が与えてくれる快楽を想像して、期待してしまうジレンマを感じていた。

「だめっ！ 絶対だめえっ❤❤ やめっ.....！！」

次の瞬間、ずりゅんという音を立てて、ペニスが一気に搾精触手に呑み込まれる。

「——————！！！！❤❤❤❤」

つま先から頭のとっぺんまで電撃で貫かれたような衝撃的快楽が走り、彼女は激しく射精した。いや、『強烈な射精反応だけ』を起こした。射精を封じられたペニスは激しく脈動するだけで、カウパー1滴漏らすこともできない。放出されるはずだった大量の精液が逆流し、睾丸内をぐるぐるとかき混ぜる。その間も、タンツ、タンツ！と、激しいセックスのような音を立て、搾精触手が激しくペニスをしごき、ねぶり、咀嚼する。強制的にキャンセルされた射精に被せるように、次の射精反応が来る。そのたびに快楽と苦痛は大きくなった。

「あ`っ！！❤ イグうっ！！❤❤ イグイグっ！！❤ があ`っ！！ 出ないっ！！❤ いぐっ！❤ お`お`っ！❤ じゃぜえできなっ...あ`っいぐっ！！❤❤ 出なっ...いいぐううっ！！❤ いぐっ❤ 出ぜなっ...！ あが`あああ`いぐっ！！❤❤ じぬっ！ ギンダマこわれ...いぐううう！！❤❤ うあ`っが`あああ`出ぜないいいいいいいイグイグイグううううううあ`あ`あ`あ`ああああ！！！」

もはや自分のペニスで何が起きているのかも分からなかった。強烈な快楽と苦痛の波が、頭で処理できない速度で繰り返され、できることは悲鳴と嬌声を交互に上げることだけだった。

彼女の脳が自ら意識を切るまで、1滴も搾り取られることのない『搾精』は、数千回に渡って続いた。

『射精管理126日目』 その後...

禁欲神に捕らわれてから、4ヶ月以上が経過した。彼女は未だに解放されることなく、変わり果てた姿となっていた。

「ふぐっ！！❤️❤️ ふううううう！！❤️❤️ ふごおおおお！！❤️❤️」

口を塞がれた彼女の叫びはまるで獣のようだった。毎日大量に母乳を生成する乳房は、搾乳量を極端に制限されているせいで牛のように膨らみ、はち切れる寸前の苦しみが常に与えられる。これだけでも人を狂わせるには充分だろう。

しかし、さらに目を引くのはその男性器だった。126日間、1度も射精できていない射精欲求もさることながら、その姿はもはや人の生殖器とはかけ離れていた。睾丸の肥大化は酷くなっており、3ヶ月前に産み付けられた卵が分裂を続けているらしく、痛々しいまでにデコボコしている。ペニスも睾丸に合わせるように肥大化され、尿道から必死にひり出すように1つずつ卵を吐き出している。

「ぐっ.....うううううう！！❤️❤️ ごおおおおおお！！❤️❤️ ふぎいいいい！！！！❤️❤️❤️」

彼女の鬼気迫るいきみ声とは裏腹に、卵が尿道を進む速度は非常にゆっくりで、1日に3つ産めれば良い方というぐらいだ。卵が尿道を通過する間、常に射精時を遥かに超える快感が襲っている。精液が通過する時でさえ意識が飛ぶような快感があるのに、卵ほどの硬さの個体が、何時間もかけて常に通過している状態ならば、どれほど暴力的な快感になるかは想像に難くない。しかも、1つの卵に受精している彼女の精子は1個。睾丸内の精子はほぼ減ることがなく、射精した後の満足感は一切訪れない。1つ産み終われば、より欲求不満感が強い状態で次の産卵が始まる。これがもう、数ヶ月間毎日続いているのだ。

「お`ごごごごっおおおおおお！！❤️❤️ ふぐうぐうううぎいいいいいいいい！！！！❤️❤️❤️ う`お`ああああああああ！！！！❤️❤️❤️❤️」

(死ぬ死ぬ死ぬううう！！ たまごもういやああああ！！ 産みだくないいいいい！！！！ じゃぜええっ！！ じゃぜいざぜでええええ！！ 終わらせでええええ！！！！！！)

射精できないまま男性器を苗床にされた彼女の叫びなど、禁欲神が聞き入れる訳がない。狂い死ぬほどの快樂と禁欲に耐え、全ての卵を産み終えるのはいつなのか、それとも終わることはないのか、終わったとすれば解放されるのか、次の調教が始まるだけなのか...。それは誰にも分からない。答えは文字通り『神のみぞ知る』だ。



射精管理126日目

おしまい



2019年9月23日頒布(ふたけつと15.5)

サークル名：ふろむアキオるーむ(アキオ)

pixiv : <https://www.pixiv.net/member.php?id=2676082>

twitter : https://twitter.com/akio_futanari

mail : from-akio-room@outlook.jp

印刷会社：株式会社明光社 STARBOOKS

ふろむ
アキオ
る一む